上州ブランド図鑑

OTA KNIT

独自の技術を結集

太田市のニット産業を後世につなごうと、2017年に新たな地域ブランド「OTA KNIT（おおたニット）」が始動した。衣料品を企画販売するマウンテンディアー（同市富沢町）が旗振り役となり、地元のニット工場が生産に協力している。「メード・イン・オオタ」にこだわり、地域発のブランド確立を狙う。

（春山未央）

「to touch」の店舗で商品を紹介する山鹿直子さん

戦後経済けん引

太田市はかつてニットの一大産地として栄え、戦後解体された地元の中島飛行機の技術者たちが手紡機を造り、ニット産業発展の礎を築いたとされる。桐生市や伊勢崎市などの織物産地に近く、材料となる糸を入手しやすかったことも、繊維産業と無縁だった太田に有利に働いた。

太田メリヤス工業協同組合（現太田ニット工業協同組合）の資料などによると、戦後は衣類の需要が高く、1952年に組合員数は141社に達した。80年代には最高出荷高を記録し、太田の地域経済をけん引した。

しかし、90年代以降は安価な海外製品に押され、ニット産業は衰退の一途をたどる。廃業や倒産が相次ぎ、組合員は現在、8社にまで減少した。

そうした中で立ち上がったのがマウンテンディアーの山鹿雅明社長（43）だ。2012年に起業した地元出身者。アパレルに携わる中で古里のニット産業の現状を知り「何とか盛り上げていけないか」と考えた。組合を訪ね、太田産ニットのブランド化に向けて協力することを提案した。

だが、組合側の反応は芳しくなかった。組合員は販路を持っておらず、在庫を抱えることはリスクだった。

顔が見える関係

マウンテンディアーはファッションブランド「to touch（トゥータッチ）」を展開し、市内にセレクトショップを構える。山鹿社長は自ら産地のブランド化の先頭に立ち、トゥータッチの製品として各工場に生産を依頼する方針に転換した。自社で在庫リスクを負う覚悟を決めた。

趣旨に賛同し、生産に協力するのは旭ニット工業（同市西新町）、黒川メリヤス（大泉町富士）、トネニット（同市新田中江田町）の3社。旭ニットは縫い目のない無縫製ニットの「ホールガーメント」、黒川メリヤスは粗い編み目のニット、トネニットは細かい編み目のニットをそれぞれ得意とし、特徴の異なる工場がそろった。

製品のデザインは山鹿社長の妻で、デザイナーの直子さん（43）が手掛ける。目指したのは「シンプルで、長く使えて飽きが来ない」デザインだ。工場とは近所で、顔が見える関係を保ち、製品の企画を進めていった。

無縫製ニットを製造する旭ニット工業。内山社長は「ニットが伝統工芸になってはいけない」と話す

隠れた地場産PR

いいもの作る

17年秋冬向けに「おおたニット」を冠したマフラーやセーター、カーディガンなど9型の製品を発売した。市の魅力を発信する「おおたシティプロモーション」認定事業となり、市の支援を受けたことも追い風になった。

組合理事長で旭ニットの内山聖一社長（54）は「メード・イン・オオタを打ち出すとは到底考えていなかった。これまでは産地としてアピールする必要性を感じてこなかったというが、組合員が年々減る中でブランド化を好意的に捉え、「消費者に認知されれば太田産の価値が高まる」と期待する。

トネニットと共に手掛けた「ファインウール ドット マフラー」は、優れたデザインの商品を選定する「グッドデザインぐんま」で2017年度に優秀賞を受賞した。磯部孝浩社長（54）は「できる限りいいものを作る努力をしている。良さを分かってくれるお客さまに手に取ってほしい」と思いを語る。

グッドデザインぐんま優秀賞のマフラーを製造するトネニット。磯部社長は「小さくても中身の濃い産地に」と将来を描く

黒川メリヤスの黒川金作社長（67）は、地元でも太田がニットの産地であることを知らない人がいると指摘。「おおたニットの良さをアピールし、地元の人に愛されるブランドになってほしい」と願っている。

1点1点丁寧に仕立てる黒川メリヤス。黒川社長（奥）は「地元の人に利用してほしい」と期待する

全国30店に

各製品はマウンテンディアーの店舗や市美術館・図書館で販売するほか、全国のブティックなど約30店に卸している。17年秋冬物はほとんどが売れ、一部は追加生産になった。

ギフト需要を狙い、マフラーなどを箱入りで販売することを検討している。18年春夏の製品も発売予定だ。「太田でニットを作っていることを身近に感じてほしい」（山鹿社長）。熱意と行動力で産地に新風を起こす。

市認定で成長促進

定住人口の獲得を目指し、太田市は2016年度から、市の魅力を発信する「おおたシティプロモーション」に取り組んでいる。

魅力の掘り起こしにつながる提案を支援する認定事業はシティプロモーションの柱の一つ。16年度は4件、17年度は「おおたニット」など2件を認定した。

担当する市広報課の河田佳樹主任（36）は市の魅力について「自動車産業1強。それは強みでもあり、弱みでもある」と指摘する。認定事業によって集まった市民目線の魅力や資源を育て、伸ばしていくことが、地域の成長につながると期待している。

【データ】グッドデザインぐんま優秀賞の「ファインウール ドット マフラー」は税別8500円、セーターやカーディガンは同1万4000円から。問い合わせは太田市富沢町のセレクトショップ「to touch」（☎0276・55・5205）へ。